

演題番号 鍼灸治療院利用者の鍼灸活用に関する関連要因の構造分析

事務局記入) ○根岸とも子(日本医学柔整鍼灸専門学校)

星 且二 (首都大学東京都市環境学部大学院)

【背景】鍼灸は6世紀に日本へ伝来して以来、日本特有の風土・文化・思想に合った改良を経て、8世紀の大宝律令で制度化された医療に位置づけられていたが、明治期以降は近代科学に基づく近代西洋医学が制度化された医療となり、鍼灸は価格、治療方法は不明で、利用の不安が大きいものの、通常医療にないものを期待されている。

【目的】鍼灸治療院の利用者がどのような目的で鍼灸を活用し、かつ継続するかについて利用当初の認識からその後の鍼灸のとらえ方、位置づけ、効果の評価を含む認知状況を理解する仮説モデルを示し、その仮説を立証することで、わが国の医療資源の活用を促す基礎資料を得ることである。

【方法】鍼灸治療院利用者の鍼灸活用にいたる要因を鍼灸に対する認識、鍼灸の利用体験、鍼灸の社会的支援の3つとした研究の仮説をもとに、2009年5月から2010年7月に研究協力者8名(男性4名,女性4名)(20代から80代)に対して半構成化面接による調査を実施した。分析テーマは対象者への面接調査によって得られたインタビューの内容をグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下GTA法)の手法を用いて鍼灸の継続活用につながるプロセスの構造を提示し、その要因の関連性を明らかにすることである。研究の意図を理解し、承諾した研究協力者と研究倫理遵守誓約書に署名し、研究協力者、研究者が各1部ずつ保管するという倫理的配慮を行った。

【結果と考察】分析の結果、3個のカテゴリー【利用者の認識】(【 】はカテゴリー)【施術者のイメージ】【利用者の行動】と3段階のプロセス、窺い、困惑、活用があった。活用継続のプロセスは、症状改善を目的に来院した利用者が施術者への依存と不満を感じた後、鍼灸治療によって‘情緒のコントロール’(‘ ’は概念)の認識により‘病氣予防・体調維持’へ利用目的が変化した。継続活用の関連要因は能力ある専門家との良好な関係、たいした副作用がないこと、不定愁訴軽減の体験、周りの支援、情緒のコントロールであった。

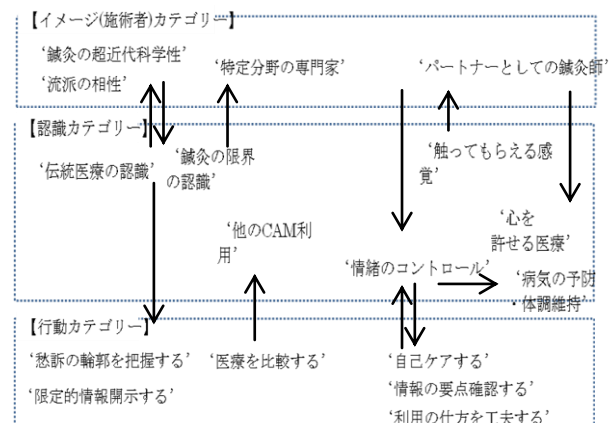


図1 継続活用プロセスの構造図

【結論】鍼灸治療院利用者は鍼灸の活用によって、仕事と調和した生活を継続していることが明らかになった。

伝統医療、代替医療関係者の参加をお願いします。

(連絡先)根岸とも子 (ねぎしともこ)

〒169-0075 新宿区高田馬場 1-18-18

E-mail ; negishi@jusei-sinkyu.com

Tel 03-3208-7741 Fax 03-3208-6488